が、然もその多くは前述の通り既に知られて居るものである。それより更に重要な意義はこの中に記されてある三箇處の地名に繫けられなければならぬ。即ちA1に qamlγ (qaml の人) といふ qaml, 同12及び13に solmïγ, sulmïγ (solmï 或は sulmï の人) といふ solmï, sulmï 同14に küsänlig (küsän の人) といふ küsän, 此等三個の地名の研究は甚だ重要なる性質を有するものと考へられる。以下順次これに關する管見を施して見よう。

第一の qaml に就いて考へて見るに、第二綴mと1との間に母音の省略されて居ることはいふまでもないが、この地方に居つた人の出生地として、この名から直ちに思ひ浮べられるのは今の哈密である。哈密といふ地名は曾て Bretschneider[13] 氏が攷究したやうに、元代から史上に現はれる名と考へられて居るもので、元史には同氏の擧げた合迷里 (卷十四。世祖本紀。至元二十三年十月の條) 合木里 (同上。至元二十六年二月の條) 感木魯 (卷二百二。八思巴傳附載、必蘭納識里傳) 哈密力 (卷一二二。巴而朮阿而忒的斤傳) 等の外にも、合迷裏 (卷十四。世祖本紀。至元二十五年十一月の條) 渴密里 (卷百三十三、脫力世官傳) 等の字面でも記され、元典章には哈迷里、經世大典の西北地附錄圖には柯模里と記されて居る。錢大昕[14]は元史 (卷百二十二) 巴而朮阿而忒的斤傳に見える罕勉力も哈密であるといひ、[15] 汪輝祖も同様に見てゐる。思ふに誤らないであらう。西方の記錄にもまた元代から始めてこの名が現はれることは矢張り、Bretschneider[16] が Marco Polo の旅行記や Marignoli の記錄を引いて述べたところである。Yule[17] はこの地が Kamul の外また Komul, Qomul, Kamil 等の形で記錄に現はれるといふてゐるが、なほ Yakut[18] の引用した Abû Dulaf の紀行を見ると Kumul とも寫されてある。Bretschneider は前記哈密についての考究に於て Potanin の說を引いて Kamul はトルコ名であり Khamil は蒙古名であると述べた。西域同文志に載せた哈密王の表文には自から Qamul といひ、陶葆廉の辛卯侍行記 (卷六) にも纏回之稱ニ哈密一、皆曰ニ哈木爾一 (或呼ニ庫木耳一) と見える。此の文書